水辺のインタビュー

樋口明雄さん『目の前にシカの鼻息』発刊記念

そろそろ釣りでもしましょうか

5月17日、樋口明雄さんに会ってきた。昨年末に初めてのエッセイ集『目の前にシカの鼻息』を小社から出版させていただいてからしばらくごぶさたしてしまった。『約束の地』（2008）で第12回大藪春彦賞を受賞して後、忙しさは募る一方だという。収録はご自宅からすぐにある樋口さん行きつけのフライフィッシング専用の管理釣り場〈ジンバ・フライフィッシングエリア〉でおこなった。

ひぐちあきお　1960年山口県生まれ。雑誌記者を経て1987年作家デビュー。冒険小説、ＳＦ小説からホラー、ライトノベルまでバリエーション豊富な作品の数々を手がけてきた。野生鳥獣保全管理官たちの活躍を描く長編小説『約束の地』（光文社）で、第27回日本冒険小説協会大賞受賞。同作品で第12回大藪春彦賞受賞。最近刊『ドッグテールズ』（光文社）。南アルプスの麓にログハウスを建てて家族と暮らして13年、愛犬ココと山を駆けめぐる日々を送っている。昨年後半から新作ラッシュが続いている。今年も単行本の新刊予定が山積み。

しとしとと降っていた雨がジンバに着いたらぴたりと止んだ。

どこに座ろうかと探して、池の水面に浮かぶ、釣り用のさん橋の上に二人して腰をおろした。樋口さんの脇には猟犬の血を引く愛犬ココが、ぴったりと寄り添っている。

ミッドナイト・ラン！

―おお、けっこう不安定なさん橋ですね。

樋口　両端は舟みたいだけど真ん中は安定してますよ。端っこで昼寝してると陸にあがってもしばらく頭が揺れてる。今日は雨上がりで下が濡れてるね。ココ、ヒール（飼い主のすぐそばに着くコマンド）。

―今年は釣りしていますか。

樋口　ジンバはまだ3回目です。本当はもっと釣りしてるはずだったんだけど、地震以来なんだかボルテージが下がっちゃってね。

―去年の中盤から後半は忙しそうでした。

樋口　一気に押し寄せてきた感じがありますね。でも準備はしていたから。新作の依頼が多くて、予定していた単行本を出せなかったのは忸怩（じくじ）たるものがありますが。

―新作の『ミッドナイト・ラン！』（講談社）は面白かったです。

樋口　うん。読者の評では「映画に向いている」と書いてくれる。ぼくも映画には向いていると思う。ああいうぶっとんだ、ありえない話を開き直って書くのは楽しいですよ。小説とかマンガは想像でつくるものの特権で、空を飛ぶはずのないものが空を飛んだっていいじゃないかというね。書いていて気持ちいいですよ。読者がいっしょに喜んでくれるのはうれしい。

―どこの釣り場へ行く予定だったんですか。

樋口　ここ何年かの釣り場は車で小一時間のホームグランドの渓流と、このジンバの池が中心です。近くの渓流はダイナミックではないけど、充分楽しめますよ。地元の強みでいつでも行ける。北杜市に越してきた当初は、野辺山や清里の向こう、八ヶ岳の川俣川の奥へも穴場を探しに行っていました。

―川俣川は『フライの雑誌』第72号に最初に書いてくれた作品（きたりもん釣り倶楽部　第一話「いま、釣りにゆきます」）の舞台ですよね。黒い橋があるという。

樋口　実際は赤い橋ね。あの橋の下はいいポイントなんだけど、川へ降りてゆくのに15分かかるんだよね。川俣川の奥は深いですよ。

青梅線の幻影

樋口　『目の前にシカの鼻息』にも書いてありますが、ぼくのフライフィッシングは山登りのアクティビティとして始まってるんです。だからいつまでもパックロッドから抜けられない。あとは技術的に遠投できない。

―失礼ながら樋口さんは相当投げられる方だと思いますよ。

樋口　いやいやいや、だめですよ。じつは湖の大物用にと思って#5／6のロッドも買ったんだけど、重くてね。ジンバにもかなりすごいのがいます。竹竿で大物がかかるとヒヤヒヤですよ。竹竿も渓流で夢中になると折っちゃいそうでこわいから、ジンバでくらいしか使わない。

―その気持ちはよく分かります。

樋口　むかしは奥多摩に竹竿もってパイプくわえて行っていた。いまでも川の夢を見ると、それは奥多摩のことが多い。フライを始めたばかりだったし印象が強烈だったのかなあ。一時期は週に2、3回通って青梅線の時刻表まで覚えちゃった。あのころが一番釣りに狂ってました。御岳の管理釣り場があるでしょう。禁漁期はあそこで丸一日釣りをする。ずーっと水の中の魚を見ている。それで帰りに電車に乗ると、向い側に座って

聞き手・まとめ　堀内正徳（本誌編集部）